



JET プログラム終了後にさまざまな分野で活躍している元 JET 参加者が、かつての任用地に戻り、自治体と協働して地域の活性化を図る新たな事業「JET ふるさとビジョンプロジェクト」がクリアによって実施された。外国青年の視点から地域活性化の新たなビジョンを切り拓く元 JET 参加者の姿を、今回のプロジェクトを受け入れた自治体関係者の声も交えて紹介し、JET プログラムを活用した地域活性化の可能性を探る。

1 元 JET 参加者による新たなビジョン

(一財)自治体国際化協会 JET プログラム事業部

プロジェクトの誕生まで

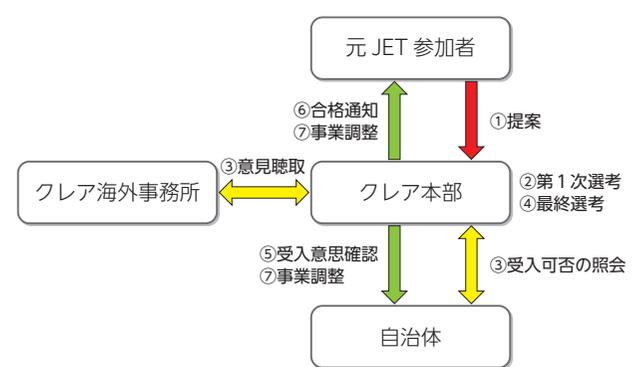
これまでの JET プログラムでは、任期を終えた青年はそれぞれの経験を胸に世界各地へ散らばり、異なる道を歩んでいった。一方で、元 JET 参加者の大半が日本を離れてからも日本との絆を大切に、JETAA（元 JET 参加者の会）等を通して日本を支援する活動に取り組んできたが、お世話になった地域の方や自治体の関係者との交流を続けようとしても途絶えてしまうケースがほとんどだった。また、せっかく数多くの元 JET 参加者を任用してきた自治体でも、元 JET 参加者の行方を把握し、その有益なネットワークを地域の活性化のために活用できている事例があまりない。

そこで、元 JET 参加者の一層の活躍を支援し、JET プログラムを利用する自治体に新たなメリットを与えるため、意欲のある元 JET 参加者を掘り起こし、自治体の活性化につながる企画を提案してもらう事業「JET ふるさとビジョンプロジェクト」が誕生した。事業の主役となる元 JET 参加者が、JET プログラム終了後に身に付けたスキルや築いた人脈を駆使し、JET プログラムでお世話になった元取りまとめ団体（都道府県・政令指定都市）または元任用団体の活性化に寄与するプロジェクトを提案し、クリアと自治体の協力で実現する仕組みだ。2017 年春から各国の JETAA 支部やクリア海外事務所

を通してアイデアを募集し、クリア本部が応募を取りまとめ、地域への貢献度や実現可能性を選考基準にし、元任用団体の受入意思も確認しながら選出することになった。

なお、多様な企画を実現させるため、また、関係者のスケジュールに対応するために、週末を含む日程（A 日程）とすべて平日で行う日程（B 日程）を設けることにした。

プロジェクト年間スケジュール	
募集期間	2017 年 3 月 17 日～5 月 8 日
選考期間	2017 年 5 月 9 日～6 月 19 日
準備期間	2017 年 6 月 20 日～10 月 20 日
A 日程	2017 年 10 月 26 日～10 月 31 日
B 日程	2017 年 11 月 6 日～11 月 11 日



JET ふるさとビジョンプロジェクト募集および選考の仕組み

世界各地からアイデアが寄せられる

プロジェクトの募集を行った結果は次のとおりである。

- ・総応募件数：106 件
- ・対象となる 33 府県および政令指定都市のうち、30 自治体に関する応募があった（プロジェクトの初年度である本年度は西日本にある自治体が対象になり、2018 年度には東日本で実施する予定）。
- ・一つの自治体あたりの最多応募件数：9 件
- ・応募者の国籍は、JET 参加国 67 カ国のうち、14 カ国にわたった

予想したとおり、30 年前から JET プログラムに取り組み、多くの JET 参加者を任用してきた歴史のある府県市にはその分応募数が多かった。

しかし、企画の数よりも、アイデアの多様性や提案した元 JET 参加者のキャリア形成の方が興味深かった。例えば、大手金融系で働くキャリアウーマンがふるさとでの女性の活躍を推進する活動を提案していたり、母国で教員になった数々の元 JET 参加者から、学校間の交流や、現役 JET および日本人英語担当教員のための研修など教育分野での交流が提案されたりしている。母国で地方公務員になった元 JET 参加者が、元任用団体との自治体間経済交流を呼びかけるプロジェクトもあった。提案された企画にはさまざまなテーマが含まれたが、ど

の企画もお世話になった地域のために役立ちたいという元 JET 参加者の強い思いが伝わってきた。いうまでもないが、最終参加者を絞るのは容易ではなかった。

幸い良質な企画が多く、さらに日本国内に住んでいる元 JET 参加者もいたことで予算面でも余裕ができたため、当初予定していた 7 人の参加者に 1 人を追加することができ、8 人の元 JET 参加者を受け入れることになった。

ビジョンの実現へ

参加者一覧^(※)を見ると、同様の事業が一つもないことがお分かりになるだろう。当然、それぞれのプロジェクトの準備内容や調整の進め方は異なり、元 JET 参加者とクリア、自治体の 3 者の役割分担について戸惑いが多く、当初は試行錯誤の連続だった。しかし、きめ細かく調整した結果、すべての関係者が納得できるプロジェクトに結びつけることができた。次ページからは、各プロジェクトの様子や準備について報告する。

★応募があった自治体は企画書の共有が可能。

(第 1 次選考で通過した企画のみ和訳)

問い合わせ：JET プログラム事業部調整課

furusato@clair.or.jp

※参加者一覧（敬称略）					
日程	氏名	国籍	職種	受入自治体	テーマ
A日程 10月26日 ～31日	ローズ・タナスガーン Rose Tanasugarn	アメリカ	ALT	島根県浜田市	石見焼・神楽
	ジェシカ・シェパード Jessica Shepherd	カナダ	ALT	愛媛県	愛媛の日本酒
	マイケル・カラスコ Michael Carrasco	アメリカ	ALT	大分県	大分の竹細工
B日程 11月6日 ～11日	パトリック・モナリ Patrick Monari	アメリカ	ALT	京都府	京都の漬物
	キャサリン・オズグッド Katherine Osgood	アメリカ	ALT	徳島県阿南市	特別支援教育
	ジュリアス・パン Julius Pang	オーストラリア	ALT	北九州市	北九州の風景
	ボルドバートル・ツェンデスレン Boldbaatar Tsendsuren	モンゴル	CIR	宮崎県都城市	宮崎牛
	ザッカリー・ジャンサン Zachary Johnson	アメリカ	ALT	熊本県天草市	アートを通じた交流

① 神楽と陶芸を通して石見地方の魅力を共有

プロジェクト参加者 ローズ・タナスガン氏

島根県浜田市



石見の魅力を世界に伝える

島根県浜田市のプロジェクトを提案したのは、米国カリフォルニア州出身で現在は兵庫県在住、熱意あふれるローズ・タナスガン氏である。ローズ氏は、江津市（1990年～1993年）および浜田市（2003年～2006年）で外国語指導助手を務め、通算6年間島根県で生活し、県西部の石見地方に愛着を持った。

今回、JET参加者時代に育てたさまざまな絆を活かし、浜田市をはじめとした自治体の協力を得て、石見神楽や石見焼といった「石見文化」の鑑賞・体験イベントを企画した。外国人25人を対象としたイベントを無料で開催することについて、浜田市の観光交流課の担当者は「浜田の伝統芸能のPRについてローズ氏が考えてくれたこと自体が嬉しく、力になりたいと感じた」と述べている。

思い出深い里帰り

ローズ氏は地方文化の発信のみならず、「今の仕事で観光業界のノウハウを得たため、予算を抑えた創造的なマーケティング戦略を石見地方の関係者に提供したかった」という熱意も示した。到着翌日の10月27日の午前、市役所を訪ね、市長への表敬訪問や知り合いの職員に挨拶ができた。午後には島根県立大学において、地元



久保田浜田市長を表敬訪問

の観光誘致に興味がある人向けのPRフォーラムおよび学生交流会を行った。ローズ氏が現在参加している「神戸PRアンバサダー」事業と、元島根県JET参加者であり現在県立大学の教授ケイン・エレナ氏が担当する「石見トラベルガイド」事業を紹介した。

28日には浜田市内でイベントの協力団体への挨拶と打ち合わせを行い、最後に会場の管理人と翌日の流れについて入念に話し合った。

石見文化を肌で体験

29日のメインイベントは、希望者が予想以上に多かったが、浜田市の協力もあり、最終的に37人の若者が無料で参加できた。浜田市内の技能実習生、県内の留学生や現役JET参加者が参加した。ベトナムの参加者が多く、英語圏と中国語圏からの参加者もあったので、浜田市のJET国際交流員が通訳した。

当日はあいにくの霧雨だったが、島根県立しまね海洋館アクアスで、浜田市の「周布青少年保存会」による実に見事な神楽の公演を鑑賞し、神楽の衣装の試着を楽しんだ。また、浜田市内の窯元「尾上窯」の陶芸家の指導の下で石見焼の制作を体験し、ハート形の食器など個性あふれる陶芸を自分の手で作った。

参加者にとって非常に満足度の高いイベントとなり、石見の文化を肌で体験した参加者が、今後母国や世界へ石見の魅力を伝える一員となることを願う。

浜田市観光交流課の担当者へのインタビュー

- Q 受け入れが決定した際、どういう期待があったか？
 A 近隣の外国人住民に石見（浜田）のことをより知ってもらえる良い機会になるのではないかと期待していた。
- Q プロジェクトを終えた感想は？
 A 参加者が皆良い笑顔でイベントに参加してくれたため、こちらも嬉しかった。この企画を実現してくれたクレアとローズ氏に感謝している。

② 架け橋を創る：愛媛の日本酒 in ケベック

プロジェクト参加者 ジェシカ・シェパード氏

愛媛県



日本酒との出会い

2011年から2015年まで愛媛県の外国語指導助手を務めたジェシカ・シェパード氏は、松山市に在住した4年の間に多様な伝統文化に触れたが、彼女にとって何より際立ったのは日本酒であった。JET 任期中、ジェシカ氏は日本酒について勉強し、優れたテイasting技術、購入・保存方法や顧客への進め方などについて知識を得て、酒ソムリエ協会から酒ソムリエ認定資格を取得した。

カナダのケベック州出身であるジェシカ氏は帰国後、愛媛県で作った絆を引き続き育てるため、在モンリオール日本国総領事館に勤め、日本酒をはじめとした日本文化をケベック州民に伝えてきた。モンリオールで開催されたイベントでは、愛媛県で取得した資格を活用してソムリエを務める機会もあった。

日本酒を広める

ケベック州では日本酒は既に人気があったが、実際に店で買える商品の種類が少なく、地元で大好きな酒を流行らせることを目指し、JET ふるさとビジョンプロジェクトに応募した。

ジェシカ氏へのインタビュー

Q プロジェクト応募のきっかけは？

A 在モンリオール日本国総領事館で行った文化交流イベントに来たケベック州民に日本酒を提供し、多くの人にどこで買えるかを聞かれた。いつも「これは総領事館の人がわざわざ日本から持って来たもので、ケベックでは買えない」と答えていたが、自分で輸入代理店の起業について考えていた。JET ふるさとビジョンプロジェクトが元 JET 参加者に各種の交流事業を支援していることを聞き、非常に良い機会だと思って応募した。

愛媛県の生産者と密接な関係を作って輸入活動を実現するには、ハードルがたくさんあった。ケベック州内の法律により、酒類の販売は基本的にケベック州酒類公社に限られている。ケベック州民は酒類を買おうとする時、ビールやワインでも、必ずケベック州酒類公社の店に行かなければならない。そこでジェシカ氏のプロジェクトの第一歩目は、愛媛県の酒造所の代表として営業するため、ケベック州酒類公社から代理店の認定を取得するこ

とだった。すべての手続きを完了し、ようやく輸入から営業までの許可を州から得た。次は里帰りだった。

愛媛での活動：視察・商談

10月26日の夜に愛媛県に到着したジェシカ氏は、翌日早朝から早速訪問を開始した。まずは、四国中央市と西条市にある酒造所2カ所を訪れて商談し、愛媛県との絆やプロジェクトの内容を紹介した。翌28日には砥部町で、地元の酒造所と商談を行った。酒造所の方はジェシカ氏を非常に歓迎し、プロジェクトに興味を持っているようであった。もちろん、1回だけの商談で輸出入契約を締結することは期待していなかったが、商談は契約締結に向けた非常に前向きな結果となり、酒造所訪問は大成功に終わった。ジェシカ氏はこの事業をプロジェクトの数日間に限らず帰国後も続けるつもりである。

酒造所を訪問した後は、愛媛県酒造協同組合が運営している日本酒専門店を視察し、在県外国人の知人と情報交換をした。29日には、ジェシカ氏が勤めていた高校の英語クラスで生徒たちに指導を行ったり、かつての恩師である居合道の先生と再会を果たしたりと、思い出深い里帰りとなった。



かつて勤務した松山中央高校を訪問

今回のプロジェクトについて自治体からは「愛媛県に里帰りをして、独自のプロジェクトを実施したいと思ってきている元 JET 参加者がいることを嬉しく感じた。元 JET 参加者は、帰国後はどうしても疎遠になりがちなので、つながりが継続し、今回のプロジェクトのように協力し合える関係を構築できるようになることを期待している。」とコメントをいただいた。

③ 大分の竹細工の文化や伝統

プロジェクト参加者 マイケル・カラスコ氏

大分県



県で守り続ける伝統工芸

大分県の名物とされるしなやかで優美な竹細工。その伝統工芸に注目したのは元大分県蒲江町（現：佐伯市）の外国語指導助手、マイケル・カラスコ氏。なんとJETプログラムに応募する時点で、「何か工芸品が盛んである地域に住みたい」と希望していた。任期はたった1年だったが、帰国後も日本との絆を大事にし、日本の陶芸品を収集するだけでなく、家の裏庭には竹を植栽しており、日本映画研究家である妻と息子と3人でよく来日しているという。2005年からフロリダ州立大学の美術史准教授となり、自ら創設した「美術館管理及び文化遺産プログラム」では世界各地の伝統文化の変遷や発達、その伝統の継承方法について研究し、指導もしている。

今回のJETふるさとビジョンプロジェクトを契機に、マイケル氏が昔から興味があった日本の竹細工に研究の焦点を置き、大学の美術史学部や日本学部をはじめ、大学が運営している州立リングリング美術館などを通してその魅力を発信することに今後挑む予定である。准教授としてのリサーチ力を発揮し、インタビューを希望する団体や竹細工職人を調べ、クレアと大分県が訪問日時の調整や当日のアテンドに協力した。結果として、マイケル氏は、4人の竹細工職人へのインタビュー、大分県立美術館と県立竹工芸訓練センターの見学、竹林業や竹工芸の継承者養成を行っているNPO団体や県の職員等とのインタビュー等ができ、とても充実した4日間になった。

海外に知られていない竹アートのルーツ

マイケル氏がさまざまな竹細工関係者と話す中、日本における竹アートの現状が浮き彫りになり、今後のプロジェクトの方向性を確認できた。アメリカの最大級美術館「メトロポリタン美術館」や、昔から近代的竹アートをアメリカに紹介してきた「タイ・モダン美術館」などが観賞用的高級美術品の展示を続けているが、そのような展示会を訪れるアメリカ人は、身近な日用品として誕生した竹細工の姿を知らないという。



編みのテクニックを極めている高見 八州洋氏（左）

今後、ふるさとビジョンプロジェクトで培った人脈と知識を活かし、大分の竹細工の多様さや長い歴史をアメリカに紹介するため、大学の美術史や日本学部のカリキュラムに竹細工に関する内容を取り入れる予定だ。「将来的に、竹細工の職人を大学に招聘し、公開授業を行い、大分県の竹細工をテーマにした展示会を開きたい」とマイケル氏は述べた。「前から取り組みたかったプロジェクトだが、大分県とクレアの支援がなければ、こんなに早く実現できなかった。元任用団体でプロジェクトを行いたい方に強く勧めたい事業である。」

大分県担当者は今回のプロジェクトに対し、「マイケル氏が熱心に研究を行い、タイトなスケジュールの中、県内各所を回り、情報を集めている姿に感銘を受けた。今回、マイケル氏を『めじろん海外特派員』に任命したので、大いに活躍されることを期待している。また、現在任用している国際交流員にも、任期終了後にこのような企画に参加してほしい。」と語った。



大分県から「めじろん海外特派員」に任命

写真特集 (A日程)

島根県浜田市



「周布青少年保存会」による迫力ある石見神楽の公演



ローズ氏が企画したイベントで島根県石見地方に伝わる「石見焼」を体験する参加者



酒造所の中まで入り、日本酒造りを見学するジェシカ氏



酒造所で地酒について教わるジェシカ氏

大分県



大分が誇る繊細な竹細工の数々



マイケル氏(左)から竹細工職人 森上仁氏(右)へのインタビューの様子

④ 日本の漬物を探求・発信しよう



プロジェクト参加者 パトリック・モナリ氏

京都府

最近注目を浴びる発酵食品

今回の JET ふるさとビジョンプロジェクトで一番若い元 JET 参加者は 26 歳のパトリック・モナリ氏である。1 年間京都府立の高等学校で外国語指導助手を務めた後、母国のアメリカに戻り、発酵食品の会社や農場などで働いていた。現在、プリンストン大学で神経科学の研究に励んでおり、胃腸と脳の関係、特に発酵食品の飲食と胃腸・脳の健康について興味を持っている。

JET 参加時、京都府に赴任して驚いたのは、無数の種類の京漬物だ。日系アメリカ人 2 世であるパトリック氏の家庭では、日本語は使われていないものの、日本の食文化をしっかりと引き継いでおり、小さいころから漬物や味噌など日本伝統の発酵食品を食べる機会が多かったが、これほど漬物の種類があるとは想像もしなかった。



プロジェクト開始前、京都府内で有機農業体験を行った

「アメリカでは、最近健康志向の人が増え、発酵食品への関心が高まっている。今こそ日本の漬物をアメリカに紹介する絶好のチャンスだ。」と思ったパトリック氏は、漬物をアメリカに紹介する計画を立て、ふるさとビジョンプロジェクトに企画書を提出した。

京職人のこだわりを世界に発信

まず、アメリカで漬物についてのワークショップやイベントを開催できるよう、より深く漬物のことを勉強することにした。自ら京都の漬物店を調べ、訪問してみたい店舗をリストアップし、クリアに提出した。小規模で漬物を製造している店も、日本人なら誰でも知っている

大手メーカーもあったが、この漬物の関係者がパトリック氏と会ってくれるかは悩ましいことだった。ここでは京都府漬物協同組合による支援が大きな助けとなった。組合から各企業の社長に事前連絡し、パトリック氏が代表の方や販売・製造に関わっている方にインタビューができるよう調整を行うなど、プロジェクトの実現に向け多くの協力を受けることができた。

パトリック氏は、本プロジェクトが開始する 1 週間前に来日し、京漬物の材料となる京野菜のことを知るため、まず京野菜の農場で農業体験を行った。プロジェクトが開始すると、クリアの同行者と一緒に 9 社の漬物企業を回り、代表の方等へのインタビューや、写真撮影を行った。パトリック氏は「一番よかったのは、千枚漬けの作り方を教えていただいたときだ。職人の凄さを感じ鳥肌が立った。」と語った。

パトリック氏は、帰国後、自分が関係を持つスーパーや発酵食品組合、飲食関係者と協力し、漬物の魅力や簡単な漬け物の作り方を紹介するイベントを開催する予定である。12 万人以上のフォロワーを誇り、パトリック氏が管理権を持つ Japan Food Today (日本食の今) という Facebook のページをはじめ、JET ふるさとビジョンプロジェクトの SNS や、個人の SNS などで発信している。



特別に漬物の作り方を披露していただいた

京都府の担当者は、パトリック氏の取り組みに対して「せっかく縁があって日本に来た JET 参加者には、日本のことを好きになってもらい、今回のパトリック氏のように、JET プログラム終了後も日本のことに関心を持ち、日本と出身国との交流を深めるために活躍されることを期待している。」と述べた。

⑤ 特別支援教育のベストプラクティス

プロジェクト参加者 キャサリン・オズグッド氏

徳島県阿南市



人生の転機になった JET の経験

キャサリン・オズグッド氏のプロジェクトにはこんなストーリーがある。徳島県阿南市で外国語指導助手だった頃、最も教えるのが好きだったのは阿南支援学校だった。障がいのある子どもたちへの教育は初めての経験だったが、そのような仕事が大好きだと気付くきっかけになった。帰国後、特別支援教育の修士号を取得し、現在シカゴの小学校で教員として勤務している。

教育の専門家となって里帰り

(1) 学校訪問

今回のプロジェクトで改めて阿南支援学校に戻り、経験豊富な専門家という新しい目で学校を見学し、授業モデルや教育方法について学んだ。包括的な教育をはじめ、障がいに関係なくすべての生徒を対象にした教育戦略など、教師や教育関係者を集めた意見交換会を行い、互いに学べることがないか話し合った。

さらに外国語指導助手として勤務した富岡西高等学校と阿南工業高校も訪問し、授業を行った。授業の中でダイバーシティ（多様性を認めること）とインクルージョン（個性を活かすこと）を紹介し、特別支援のキャリアについて生徒たちに考えさせた。



多くの教育関係者が集まった意見交換会
(右端がキャサリン氏)

(2) 現役 JET 参加者への支援

障がいのある子どもたちを教えている現役外国語指導

助手向けにセミナーを実施した。支援学校で教えている外国語指導助手や学校内の特別支援クラスを訪問している外国語指導助手の多くは特別支援教育に係るトレーニングを受けたことがなく、悩んでいる。キャサリン氏は教室ですぐに使えるアクティビティやアドバイスを提供した。

徳島県の担当者へのインタビュー

Q 実際にプロジェクト終えての所感

A 「特別支援教育のベストプラクティスに関するプロジェクト」という、分野が限定された企画であったため、生徒やセミナー参加者の興味・関心を引くことができるかどうか多少不安があったが、訪問した学校の教員・生徒に温かく受け入れられ、セミナー参加者も積極的に質問するなど、特別支援教育について考える良い一歩になったのではと感じている。

Q 元 JET 参加者を活用した事業について

A JET 期間中は国際交流員、外国語指導助手に限らず、配置された地域に根ざした業務や活動を行う方が多く、また、親日派・知日派が多いと思うので、地方の魅力発信・地域活性化においてワールドワイドに発信できる効果的な事業であると思う。

プロジェクトを振り返って

キャサリン氏は今回のプロジェクトを次のように振り返る。「これまで身に付けた知識を共有するのはふるさとビジョンプロジェクトのいいところだと思う。阿南支援学校へ戻り、校長先生に県内外の特別支援教育について説明していただいた。さらにアメリカの特別支援教育について発表させていただき、多くのアイデアを交換できたと感じた。教師同士の立場から話し合っ、JET プログラム任期中とは違う経験ができた。JET プログラム参加で来日する際にも知識は持っているが、帰国後新しいスキルや技術を学び、お世話になった人たちに恩返しすることができたら素晴らしい。JET 任期中に周りの人たちに良くしていただいていたので、少しでも恩返しできたら嬉しい。」

JET プログラムの経験を経て教師になろうと思う JET 参加者は少なくない。JET プログラム参加をきっかけに学校と学校の架け橋になり、お互いから学べる教育交流ができることを望む。

⑥「クール北九州」北九州の魅力を世界に発信



プロジェクト参加者 ジュリアス・パン氏

北九州市

ふるさとは心の拠り所

北九州市で外国語指導助手を務めたジュリアス・パン氏にとって、心の拠り所こそが「ふるさと」の本質である。地元のオーストラリア・パース市から離れ、2004年から3年間の北九州市での生活を通じ、北九州に対して「ふるさと」として愛着を持つようになった。帰国後も北九州市への思いを強く抱き、自分の愛する地域のために貢献したい気持ちを込めて、「JET ふるさとビジョンプロジェクト」へ応募した。

「プロの写真家なので、自分の撮影スキルを活かして北九州の魅力が伝わる写真や動画を撮り、観光ポテンシャルを探りたい。新たなビジョンを創出することにより、『ふるさと』の『美（ビ）』を世界に発信したい。」とジュリアス氏は抱負を述べた。

計画から実施への歩み

ジュリアス氏は北九州市で働いた経験を活かし、撮影行程を自分で作成し、提案した。今回、写真や動画の撮影だけでなく、ドローンによる北九州の風景の空撮も行ったため、各施設との調整や効率の良いスケジュールを組むことが大変だったが、北九州市の方々からの積極的な協力を受けることができ、実施の段階へ順調に進んだ。

写真撮影では、日の出・日没といったライティング環境が良いタイミングを逃してはいけないため、ジュリアス氏は朝早くから夜遅くまで精力的に撮影を行った。九州と本州をつなぐ関門橋、門司港レトロ、小倉城といった北九州の定番観光地をはじめ、まだ広くは知られていない広大な平尾台、千仏鍾乳洞、牡鹿鍾乳洞などにも足を運んだ。また、モノづくりの街である北九州の特徴をPRするために、TOTOミュージアムや安川電機、そして北九州ならではの工場夜景の撮影にも力を入れた。イチ押しの景色は、皿倉山から眺めた北九州の夜景だとジュリアス氏は述べた。短いスケジュールだったが、見事な写真がたくさん撮れ、ジュリアス氏の北九州への情熱が地元の方々十分に伝わるプロジェクトとなった。



ジュリアス氏が撮影した千仏鍾乳洞

今後の展望

本プロジェクトで撮影した市内の観光地などの写真や動画は、北九州市が今後、観光PR資材として使用する予定である。また、このように元JET参加者を活用する事業について、北九州市の担当者は「元JET参加者の方々は、赴任していた地域に愛着があるため、地元にとっても理解があり、市にとっても心強いパートナーだと感じた。今後もお互いにWin-Winの関係が築ければと考えている。」と語った。

さらに、現在旅行会社を運営しているジュリアス氏による北九州市を含む日本での写真撮影ツアーの企画を通じて、欧米豪からの誘客の拡大が期待されており、「北九州の魅力を世界に発信」という目的に向けて、将来的に更なる取り組みが続くと考えられる。

ジュリアス氏へのインタビュー

Q 今回のプロジェクトにおいて、最も良かった点は？

A 新鮮な目線で見ることができて良かったと思う。また、今まで行ったことのない場所にも行けたので、北九州での6日間に疲れながらも充実感が大変感じていた。

Q 他の元JET参加者へメッセージをお願いしたい

A 日本での「ふるさと」へ恩返ししたいと考える元JET参加者が多いと思うが、どのように貢献して良いのか迷っている人には、JETふるさとビジョンプロジェクトへ参加することをお勧めする。クリアや自治体から最大限のサポートが得られ、赴任した地域へ貢献することができるだけでなく、日本のことを世界に広げることができるので、きっと有意義な事業になる。

⑦ テレビ番組を通して、モンゴルで宮崎牛を PR



プロジェクト参加者 ボルドバートル・ツェンデスレン氏

宮崎県都城市

自治体と元 JET 参加者の力を合わせた PR

都城市は、2014 年度のウランバートル市場調査を皮切りに、2015、2016 年度に実施し、2017 年度も計画している「海外販路開拓支援事業」において、都城市産宮崎牛の魅力をモンゴルの方々に知ってもらうため、在モンゴル日本国大使館主催の天皇誕生日祝賀レセプションパーティーやウランバートル市内日本食レストランでの宮崎牛試食会など、地道な PR を行っている。

その活動について知っていた都城市の元国際交流員ボルドバートル・ツェンデスレン氏は、現在モンゴル国内でテレビ番組の制作に携っており、モンゴルで放送されるテレビ番組を今回のプロジェクトを通じて作成することで都城市の活動に役立てるかと思い、宮崎牛をテーマとする番組制作を JET ふるさとビジョンプロジェクトに提案した。

宮崎牛の魅力を撮影

市長へのインタビューから始め、3 日間に渡りさまざまな映像を収録した。都城市にある牧場を実際に訪問して放牧の様子を撮影し、宮崎牛のレストランでは宮崎牛の料理も撮影した。最後に、金御岳からの街の風景や市役所など、自治体の PR になる映像も撮影した。



宮崎牛を育てる都城市の牧場取材するツェンデスレン氏

ツェンデスレン氏は帰国後も、1 月の放送に向けて番組の撮影と編集を続けた。11 月に都城市がモンゴルを訪問したため、そのときのイベントの映像も番組に入れた。

自治体をよく知る元 JET 参加者というソフトパワー

都城市の担当者は次のように語る。「今回の提案で更に多くの方々に宮崎牛の魅力と美味しさを知ってもらえると期待している。また、ツェンデスレン氏が都城市の取り組みを理解し、更には、そのための番組を制作することで都城市の今後の事業にも拍車がかかるだろう。ウランバートル市とのこれまで以上の交流関係が築かれていくことを願っている。」

ツェンデスレン氏のように自治体の最近の活動を把握している元 JET 参加者であれば、自治体にとって大きな力になるだけでなく、「自治体の力になりたい」という元 JET 参加者の意欲も高いといえる。JET プログラム終了後の JET 参加者の勤務地や職業は実に多様である。JET プログラムのいわゆるソフトパワーである、「日本のファンである元 JET 参加者」と連携し、独自のプロジェクトに取り組む自治体が今後増えることを願う。

ツェンデスレン氏へのインタビュー

Q プロジェクト応募のきっかけは？

A 国際交流員だったときに、任用団体であった都城市ですごく良い経験ができ、多くの人との交流を経て都城市のことが好きになったので、またいつか戻りたい、皆さんたちとつながりたいと思っていた。また、当時多くの人に優しくしてもらい、恩返しできることがあればいいと思っていた自分にとって、今回の JET ふるさとビジョンプロジェクトはすごく魅力的な事業だった。自分の今のスキルで何か皆さんに恩返しできればと応募した。

Q 今回のプロジェクトにおいて、最も良かった点は？

A このような私のプロジェクトに対し、都城市の皆さんがとても喜び、感謝してくれたことこそが何より嬉しかった。モンゴルに帰ってから編集作業はあるが、皆さんに喜んでいただいた分、頑張っている番組を作りたいと強く感じた。

⑧ Hidden Histories 隠れた歴史

プロジェクト参加者 ザッカリー・ジャンサン氏

熊本県天草市



魚の町「牛深」

熊本県天草市の元外国語指導助手、ザッカリー・ジャンサン氏は、JET プログラム参加時から、アートを通して地域の人を巻き込み、新しいコミュニケーションを作り出す「コミュニティアーティスト」として活躍していた。学校の廊下や市の文化交流会館で知り合いのアメリカ人アーティストから寄せられた作品を展示したり、実際にアーティストを学校まで招いてワークショップを行ったり、街中に参加型のアート作品を設置したりするなど、アートを通して地域を盛り上げようとしていた。

そのザッカリー氏がアメリカへ帰国後も想いを馳せる場所があった。かつて日本でイワシ漁獲量 2 位を誇り、漁業で栄えていた牛深港であった。現在も熊本県下屈指の漁港だが、以前と比べて漁獲量が減少し、少子高齢化などの影響を受け、商店街はシャッター街となっている。しかし、ザッカリー氏にとっては、その牛深は刺激的な場所であった。シャッター街ではあるが、華やかな壁画や楽しい看板が連ねられ、イワシ景気時代の繁栄ぶりを物語り、訪れる人の町の歴史に対する興味をそそる。「なんとかしてこの悲しみを嬉しさに変えたい」と決心し、ザッカリー氏が今回の Hidden Histories (隠れた歴史) というアートプロジェクトを企画した。

町の歴史を地域と一緒に探る

ザッカリー氏が住んでいるミシガン州グランラピッズ市は、米国で最も経済成長を見せている自治体の一つである。一方、その経済効果はザッカリー氏が毎日通るバートン・ハイツ地区にはなぜか届かず、空き店舗や空き家が増え、取り残されたと感じる人がどんどん他地域へ流れてしまう。そこで、ザッカリー氏はバートン・ハイツ地区と牛深地区の住民にインタビューし、思い出のある場所について語ってもらうことにした。参加者の思い出を紙に綴ってもらい、思い出のある場所の写真と、参加者の写真と、文章という 3 点を組み合わせて展示会にする予定である。展示会を訪れる人が、一見何も縁がなく、異なる社会現象に直面している 2 つの地域のこと

を勉強しながら、その共通点を探ることが狙いである。

ザッカリー氏が里帰りしている間、中村天草市長を含め 12 人の市民へインタビューし、思い出がある場所について話を聞いた。天草市が募集した参加者がほとんどだったが、一部が町で出会い、飛び入りで参加した方だ。

「昔ここに文房具と本の店があり、若い頃友達とバスで 1 時間かけて漫画を買いに行った。」「ここにあった店がカラフルなテープを販売していた。集団就職でふるさとを離れる人に持ってもらい、船が出港してテープが切れるまで見送る家族がしっかり握っていた。」「昔、小さな息子と夕方の散歩で漁に出る漁師さんに手を振っていた。普段は厳しい顔をしている漁師さんがいつも笑顔で挨拶を返してくれた。」など、参加者の思い出と選ぶ場所はさまざまだった。同行した天草市職員も「天草に住んでいる者でも知らなかった牛深の歴史を知ることができ、私達自身も楽しめたプロジェクトであった。」とコメントした。



市民の思い出のある場所で撮影を行うザッカリー氏

町の宝は「人」であった

ザッカリー氏が写し出すのは町のストーリーである。今年夏に開く展示会では、牛深とバートン・ハイツの人情溢れる街並みよりも、地域住民のふるさとへの強い思い、また、人間が求める人と人とのつながり、地域の最高の魅力である「人」を発信したいそうだ。「人がふるさとの魅力を再確認することができ、それで地域の力になれば嬉しい。」とザッカリー氏は語った。

ザッカリー氏の作品は以下の URL からご覧いただけます。
<https://www.zacharytrebellas.com/>

3 元 JET 参加者活用の可能性

(一財)自治体国際化協会 JET プログラム事業部

プロジェクト成果を発信

今回初めての試みであった「JET ふるさとビジョンプロジェクト」は、元 JET 参加者の画期的なアイデアや、多くの自治体関係者の努力により、各参加者のプロジェクトをほぼ当初の予定どおりに実現させることができた。また、プロジェクト実施中、参加者が持つ「ふるさと」に対する熱い想いが注目され、2つの地方紙、2つの全国紙（地域版）、地域ケーブルテレビ2局、NHK 地域支局2局に取り上げられ、JET プログラムや本プロジェクトの魅力を広く発信することができた。

そして、より多くの自治体関係者や JET プログラム関係者にプロジェクトの内容を知ってもらうため、各実施期間の最終日にはクリアの東京本部にて報告会を開催した。日本各地から派遣されているクリア本部の職員のほか、受入自治体の東京本部職員、JET プログラムを推進している総務省と外務省、文部科学省の職員なども出席し、プロジェクト参加者のプレゼンテーションに聞き入った。各プレゼンテーションの終了後、活発な質疑応答が続き、元 JET 参加者を活用した地域活性化の取り組みへの関心の高さがうかがわれた。



クリア本部で行われた報告会の様子

今後の元 JET 参加者活用の推進

従来の元 JET 参加者の支援は、主にボランティア団体「元 JET 参加者の会」(JETAA) を通して行われ、JET

プログラムの推進や、参加国と日本の草の根レベルの交流に重点を置いてきた。JET プログラムの取りまとめに関わるクリアおよび3省の関係者は今まで JETAA の広いネットワークを活用し、元 JET 参加者から聴取した意見を踏まえ事業の改善を図ったり、JET プログラムや日本のことを発信したりしてきた。だが、JET プログラムの主体者である日本の地方自治体ではあまり元 JET 参加者との接点はなかった。ところが、今回のプロジェクトは、JET 参加者を任用している自治体と元 JET 参加者との新しいチャンネルを整える大きなチャンスとなり、今後は元 JET 参加者が地方自治体で大活躍する時代が到来するのではないかと思う。他国から来日している元 JET 参加者は、日本人にはない視点で自治体を見ることが出来る。一方で、一定期間をその地で過ごすことにより、外国人観光客とも異なる視点を持つことになる。元 JET 参加者だからこそ見出すことができる独自の「ビジョン」には、限りない可能性が秘められているのではないだろうか。

2018 年度には、元任用団体が東日本にある元 JET 参加者から企画書を募集し、再び JET ふるさとビジョンプロジェクトを行う。2月からは募集の案内が始まるので、今一度ご存じの元 JET 参加者に連絡し、あなたの自治体でプロジェクトを行わないかと声をかけてみるのはいかがでしょうか。きっとあなたの自治体の力になってくれるだろう。



NHK 熊本放送局から取材を受けるザッカリー氏（熊本県天草市元 ALT）

写真特集（B日程）

京都府



多数の漬物が並ぶ店舗で試食するパトリック氏



京都の漬物協同組合や漬物企業を訪問しインタビューするパトリック氏



特別支援教育のベストプラクティスについて教師と意見交換

徳島県阿南市



「ふるさと」に歓迎されるキャサリン氏
(徳島県庁で県担当者から歓迎を受ける様子)

北九州市



プロの写真家として北九州市の観光地等を撮影するジュリアス氏（小倉城での撮影の様子）



ジュリアス氏が撮影した高塔山からの夜景



宮崎牛の魅力が伝わるよう撮影

宮崎県都城市



宮崎牛と合わせ自治体としての魅力も発信

熊本県天草市



天草市で当時の職員と再会するザッカリー氏



「人」にスポットを当て、市民から牛深の歴史を教わるザッカリー氏